

戦後説明的文章指導論の一基点  
—1961年学習指導要領実施をめぐる諸方面の動向—

植山 俊宏

One Point of Postwar Descriptive Text Reading Comprehension Theory  
— 1961 Trends in Various Areas Regarding the Implementation of the Course of Study —

Toshihiro UYAMA

教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要

第3号 (2021年1月)

Journal of Educational Research  
Center for Educational Career Enhancement

No.3 (January 2021)

# 戦後説明的文章指導論の一基点

—1961年学習指導要領実施をめぐる諸方面の動向—

植山俊宏

(京都教育大学)

One Point of Postwar Descriptive Text Reading Comprehension Theory

—1961 Trends in Various Areas Regarding the Implementation of the Course of Study—

Toshihiro UYAMA

2020年9月30日受理

抄録：昭和36（1961）年学習指導要領実施により説明的文章指導論は確立、隆盛に向かう。本稿では、そこに至るまで、「読解」、「読解指導」、「指導過程」などの主要な用語、概念の整理、変更・変容を考察し、それが説明的文章指導論の確立に重なるものであったことを明らかにした。

キーワード：戦後説明的文章指導論、説明的文章、読解指導、実践の基点、理論の基点、地方教育史

## I. 問題の所在

### 1. 研究の目的

戦後の説明的文章指導論は、昭和33（1961）年学習指導要領が契機となって生じたという説が有力である。しかし、それ以前に「文種（ジャンル）別指導」や「読解指導」といった指導の概念や方法が打ち出されており、それらを胚胎としてとらえることができる。ここでは、先行研究1)2)3)4)5)6)7)8)9)10)をふまえ、単元学習への批判、及びその具体策として唱えられ、盛行を見た「読解指導」論を戦後説明的文章の一基点と考へ、その詳細を明らかにする。また地方国語教育史の観点から年史等の資料を基に、説明的文章指導論の地方への波及、発展をとらえることも目的とする。

### 2. 主要な基点の整理による問題の所在の確認

当時の文献、雑誌、行政事項から、戦後の読むことの教育、及び説明的文章指導論にかかわる主要な基点が次のように見出せる。※下線は稿者による。

①読むことが「読解」という用語に変更されていく

○『読むことの教育』（宮下忠道／習文社／1952.3）／『読むことの学習指導』（石黒修・滑川道夫・西原慶一・平井昌夫・増淵恒吉／牧書店／1953.7）／『言語・文学・読解・作文 指導大系 実践国語研究紀要Ⅰ』（西原慶一編／穂波出版／1956.1）

②「読解」に「力」が付され、「読解力」という語になり、学力形成が明確になる

○『読解力の学習指導』（西忠義／光風出版／1955.4）／○『読解力向上の理論と実践』（沖山光1957.1金澤書店）  
▽昭和32（1957）年6月『第一回全国学力調査報告書（昭和31年9月実施）』（文部省）

③「読解」の指導が「読解指導」という用語に収斂されていく

○昭和28（1953）年11月『実践国語』第158号「特集 読解指導」／○昭和31（1956）年11月刊『読解指導』（倉沢栄吉／朝倉書店）／昭和34（1959）年6月『学校文法文章論』（永野賢／朝倉書店）※本格的な文章論的読解指導の最初

④「読解指導」と「説明的文章」の「指導」が合体する形で「説明的文章指導論」が確立する

○昭和32（1957）年4月『説明文の読解指導』（倉沢栄吉・小塚芳夫・佐々木定夫共編／東洋館出版）  
▽昭和33（1958）年10月小学校学習指導要領告示

⑤「読解指導」が定式化し、「読解指導過程」という語に統一されていく

▽昭和36(1961)年4月小学校学習指導要領全面实施

▽昭和36(1961)年11月『読むことの学習指導』(文部省) ※説明的文章指導法の解説書

○昭和38(1963)年児童言語研究会『読解指導過程』/昭和38(1963)年奥水実「基本的指導過程」『初等教育資料』

これを見ると、用語や概念が時期的に重複しつつ次第に整理され、昭和36(1961)年4月小学校学習指導要領全面实施を契機に、昭和38年に一読総合法、基本的指導過程の二大読解指導過程の提唱に結びついたことが分かる。そうすると、このピークに向けて、用語や概念が整理されていく過程にいくつかの基点が見いだせることになる。

## Ⅱ. 戦後説明的文章指導論の胚胎に関わる読解指導論の生起

### 1. 井上敏夫の整理<sup>11)</sup>

(1) 「読解指導」という用語—用語の定着が基点として果たした役割—

井上敏夫は、読解指導という用語に至るまでの道すじについて検証し、戦前の経緯を踏まえて、戦後に至って、次のように「読解指導」へと定着していったという。

戦後の「読むこと」指導というよび方も、術語としての的確性に欠けていたためか、「読解指導」という用語が、次第に慣用されるようになり、はじめ「読解・読書」と並称され、「読むこと」指導の一部をさしていた「読解指導」の語が、昭和三一年ごろから、「読むこと」指導の全領域をおおう用語として、用いられるようになる。

(2) 戦前の「読解指導」の使用<sup>12)</sup>

読むことの領域に関して、『国語教育研究大辞典』巻末の「国語教育主要文献目録」を見ると、大正期以降昭和戦前期までは、二、三の例外的な文献名を除いて「読方」に統一されており、井上の指摘どおりである。ただし、『国語讀本 讀解指導と其實例』(五味義武 1929.6 東洋図書)という著作が戦前に出ており、単著として「読解指導」の名を持っている。が、内容的には読み方教育の別称として使用しているだけであり、独自性はない。

### 2. 常木正則の読解指導の集約—基点となりえたことの確認—<sup>13)</sup>

国語教育辞典類において読解指導について集約を行った論述として、次のものがある。

歴史的経緯 読解指導という術語が国語科教育の場に登場したのは1953(昭和28)年ごろのことである。『実践国語』が特集「読解指導の研究」(第14巻158号)を組んでいる。読解という語はそれまでは古典を読み解く意味で使われることが多かった。経験主義的国語教育においては、戦前に実践されていた精密な読み方教育が後退した。その結果読解力の低下が当事者に意識されたことにあった。1956年に倉沢栄吉の『読解指導』が出る。昭和30年前後、読解指導がブームとなる。昭和30~40年代に読解指導関係の図書が多く出ている。以後、読解指導という術語は国語科教育に定着し今日に至っている。

### 3. 『読解指導』(倉沢栄吉 1956.9)以前の読むことの指導論—重要文献が果たした基点としての役割—

(1) 書名に「読解指導」を最初に使用した『読解指導—読みの基礎能力—』(倉沢栄吉/朝倉書店/1956.9)

「読解指導」を正面から論じた初期の著作として著名である。本文冒頭の七行目に「読解指導の中で大事な、しかも固有の領域であるところの『物語読解の指導』には、とくに思いきった改革がなされなければならないのです。」とあり、本書が物語の読解指導に重点を置いていることが示されているが、「第五編 読解指導の具体策」には「第二章 実用文読解指導の具体案」(pp. 227-260)が立てられて、「第二節 説明文」(pp. 230-238)まで設けられている。指導過程についても詳述されており、またジャンルの分類も広範な視野に基づいて行われている。

なお、前出の文献目録によれば、「読解指導」を掲げた書名は、『読解指導—読みの基礎能力—』(倉沢栄吉/朝倉書店/1956.9)が最初となっている。これ以前の著作に『小学校の読解指導』(志波末吉・西村省吾/明治図書/1956.5? ※初刊月の詳細不明)があるが、同年の刊行である。同書は文献目録には欠落している。

(2) 『読解指導』以前の読むことに関する文献

未見のものも含めて、以下のような著作が出されており、こちらも井上敏夫の指摘通り<sup>11)</sup>になっている。

○『読むことと教育』(宮下忠道/1952.3/習文社)

- 『読むこと』(安良岡康作/1952 ※未見)、『読む力をこう育てる』(今井鑑三/1952 ※未見)
- 『学習指導の基礎技術 国語科』(西村省吾・大村正幸/1953.6/明治図書)  
「第五章 読む経験の技能とその指導技術」(西村省吾執筆)が立てられており、その中に「文を読解する」という節があり、さらに「思索・記録文の読み方」という項が設けられている。「読解指導」という語は見当たらないが、「読解方法」という語は見受けられる。
- 『読むことの学習指導』(石黒修・滑川道夫・西原慶一・平井昌夫・増淵恒吉/1953.7/牧書店)
- 『国語の研究授業』(志波末吉/1954.4?/明治図書)  
同書において「読解指導」という術語は一回しか登場しないが、「読解学習」「読解活動」は多用されている。また小学五年生教材をとりあげて「論説文の読解学習」という節が設けられている。
- 『入門期における読みの指導』(猪股辰弥/1954.6/光風出版)
- 『読みと作文の心理』(阪本一郎/1955.1/牧書店)
- 『明治図書講座国語教育1 読みの学習指導』(全日本国語教育協議会編/1955.7/明治図書)
- 『国語教育の諸問題—反省と提案—』(日本国語教育学会/1955.10/光風出版)  
「小・中・高・大学の読解指導の特殊性」という部立てがあるが、その章の一つに「小学校における読解力指導の特殊性」(pp. 57-63 増田三良)があるなど、部の名称と不整合を起しており、用語的に未整理である。
- 『学習指導の今日の問題—各教科の問題点とその解明—』(広島大学教育学部附属小学校学校教育研究会/1956.5/明治図書)  
「読解指導における基本的課題」の部が立てられており、その一つの章に「その実践的対策」「二節 文章類型の問題」中に『『説明文』の読解指導』という項(pp. 170-171)が設けられている。「説明文の読解指導」が明確に打ち出されている最も早いものの一つである。また「記録文の読解指導」「通信文の読解指導」の項もある。
- 『小学校の読解指導』(志波末吉・西村省吾/1956.5?/明治図書)  
総論に当たる「第一章 読解指導の重要性」には、「知識的文章の読解」「説明文」「科学的文章」について触れている箇所があるが、後続の「文の種類」の学年的段階表には、「記録」「報告」しか見られない。さらに「第四章 読解指導の実際」に七つのジャンル別指導例が掲げられているが、説明文の項はない。
- (3)『読解指導』(倉沢栄吉/1956.11/朝倉書店)以前の読解指導論
- 『小学校教科指導基礎講座 国語科』(倉沢栄吉責任監修/1956.11/金澤書店)  
「読解の学習指導」という語が用いられているが、説明的文章に関する記述はほとんどない。
- 『読解力向上の理論と実践』(沖山光/1957.1/金澤書店)  
書名こそ「読解力」が用いられているが、本文では「読解」、「読解指導」が多い。説明文の項はない。
- 『国語科 読解指導』(広島大学教育学部附属小学校学校教育研究会著/1957.6/明治図書)  
「第四章 読解指導の具体相」が立てられており、その中に「知的読解の学習指導」という節が設けられている。内容は、小学校高学年の説明文指導例となっている。
- 『基本文型による読解指導』(堀川勝太郎/1957.10/明治図書)  
読解指導が中心のような書名が付けられているが、内容は、文法的説明が主である。特に説明文に関する章・節は立てられていない。「読解指導」が他の領域と結びつき始めた例と考えられる。
- 『明治図書講座国語指導法体系2 読解指導法』(興水実/1957.11/明治図書)  
教材研究、指導事例、カリキュラム、能力検査など、読解指導法に関わらない領域のものまで収められている。説明文の指導事例が一例示されている。読解指導に関して、原論的、体系論的に論究したものではない。
- 『意味構造に立つ読解指導』(沖山光/1958.5/明治図書)  
「構造的読解」というキーワードで自説を説く。特に説明文に関する章は設けられていないうえ、六例の教材研究例のうち五例までが文学教材である。唯一六年生の「東西文化の交流」のみが説明文の事例である。
- 『読み方教育学』(興水実/1958.6/明治図書)  
「序」には、次のような記述がある。当時の「読解指導」をめぐる問題の一端が現れているように受け取れる。
- 学校の国語科の中の『読み』の学習指導を、戦後は『読解指導』と呼んでいる向きが多いようです。しかし、この『読解指導』には、ふつう『読書指導』が含まれません。われわれがねらっているのは、読書指導と一体と

なった読解指導です。それに、われわれは、読解指導という場合の「読」と「解」についても、簡単にいっしょにしたくない。そこに読みの指導と解釈の指導とを、方法的に段階的に、区別した上で、その統一を考えたいのです。そうしたすべてをふくめて昔からの「読み方」という語であらわし、いろいろの読書科学的研究の成果に立って教育方法を説くという趣意で「読み方教育学」と名づけました。

○『国語教育の本質』(国分一太郎/1958.10/明治図書)

「この本におさめられた評論について—あとがきがわりに—」の最終ページに「作文教育と読解指導との交互関係」とあり、そこだけ「読解指導」の語が用いられている。説明的文章指導論関係の論考はない。

○『国語指導過程』(望月久貴/1958.11/明治図書)

目次に「読解」「読みの指導過程」という語は見受けられるが、「読解指導」という語は用いられていない。ただし、本文中には、「読解指導」は一般的な用語として使用されている。説明的文章指導論については詳細な記述はないが、文学作品に対置される「実用的文章」の扱いとして言及がある。

○『読解指導の過程』(志波末吉/1959.2/明治図書)

昭和31年9月実施の文部省全国学力調査の結果をふまえて、読解指導の重視を唱えている。説明文という語も見受けられるが、「戦後の文のジャンルに即する指導が強調された時代には、その分類が、非常に細かであったが、それは指導上に必要以上の細分であり、実際にも成功しなかった」ことをふまえて「文章を知的文章と、情意的文章に分類するのが適当である」という立場を採る。書名に反して読解指導過程は示されていない。

(4)「読解力」の用語使用

現在確認している文献は、以下のものである。井上の指摘とやや錯綜する事実として、「読解」あるいは「読解力」という語の使用がやや先行していることが挙げられる。指摘とは別の流れがあったことが推測できる。

○『読解力の学習指導』(西忠義/1955.4/光風出版)

○『言語・文学・読解・作文 指導大系 実践国語研究紀要I』西原慶一編/1956.1/穂波出版)

これとは別に、例えば、『国語教材研究』(古田拓/法政大学出版局/1955.7)の記述にも「読解」及び「読解力」という語が用いられているように、「読解」の語は一般化しつつあったと考えることができる。

(5)『読解指導』(倉沢栄吉 1956.9)から流布した「読解指導」の用語

「読解指導」の用語は、昭和31(1956)年刊行の『読解指導—読みの基礎能力—』(倉沢栄吉/1956.9/朝倉書店)により広く受け止められるに至ったと思われる。これに関して、市毛勝雄は、次のように述べている。<sup>14)</sup>

読解という語が一般的な「文章を読み、解く」という意味として考えられ、教育にも使われたのは明治のころからであろう。だが今日のように術語として「読解」という語が定着したのは、ほぼ昭和三〇年ころであり、当時の多くの実践を前提として、倉沢栄吉著『読解指導』(朝倉書店)が現れたのが昭和三一(一九五六)年であった。この書物の背景には、その一〇年前に終わったばかりの太平洋戦争の敗北の原因が科学の大きな差であり、神国思想を生みだした観念偏重の教育を助長し、科学的論理的思考を正しく育てることができなかったという国語教育界あげての痛切な反省があった。今日でもこの著作を読むと社会における言語能力の期待に応じようとする、合理主義思想に根ざした有益な提言を数多く汲み出すことができる。

(6) 昭和30(1955)年を越えてから一般化した読解指導という国語教育上の概念

読解指導の概念が一般化し、実践現場にも流布したのは、意外に新しく昭和30(1955)年を越えてからである。昭和26年学習指導要領と昭和33年学習指導要領の中間に当たり、この両者との影響関係が問題となってくる。

#### 4. 読解指導論定着と学習指導要領との関係—基点の確定とその影響—

(1)「読解指導」と昭和26年学習指導要領能力表との関係

昭和26年学習指導要領能力表との関係で読解指導をとらえた文献として、前出の『小学校の読解指導』を挙げることができる。「第三章 読解指導の学年段階 一 よりどころとしての能力表(pp.52-59)」という節があり、能力表の読みの関係項目を系統的に再整理している。

先に整理した「読むこと」や「読解」を書名に含む文献の刊行年を見ると、全てが昭和27(1952)年以降であることから、昭和26年学習指導要領能力表との関係が濃いことがうかがわれる。

(2) 昭和33年学習指導要領作成の要因としての意味

読解指導論の盛行が昭和33年学習指導要領への要因という考え方もできる。倉沢栄吉の『読解指導』は、刊行年からして、影響を与えなかったとは考えられない。昭和30年前後から起きた読解指導論が、市毛の指摘するように「科学的論理的思考を正しく育てることができなかったという国語教育界あげての痛切な反省」を反映し、「合理主義思想に根ざした」とすれば、それが昭和33年学習指導要領に結びついたと考えることもできる。

井上敏夫は、次のように述べている。市毛の指摘に重なる記述である。<sup>15)</sup>

とくに、昭和三十一年、第一回の文部省学力調査の結果、国語科で劣っているのは、読解力、とりわけ説明的文章の読解力であるということが指摘され、このころから、文種別読解指導、説明的文章の読解指導という話題が喧伝されるようになる。

説明的文章の読解指導が重視されるようになったのは、他に教育課程にあたって、教育課程審議会がうち出した、「基礎学力の充実」「科学的技術教育の振興」という方針が、与って力あるものである。国語科はもっと他教科学習のための基礎になる力を充実しなければならない、社会科・理科・算数の教科書などを正確に読めるようにすることが国語科の大事な任務である、という意見である。

### Ⅲ. 説明的文章指導論と読解指導

#### 1. 全国大学国語教育学会の研究動向—基点づくりのために研究組織が果たした役割—

##### (1) 石井庄司の整理<sup>16)</sup>

わが学会としては、すでに、昭和二十九年度において、「国語基礎学力」をはじめ、「文学の学習指導」、「文法の学習指導」「言語生活の学習指導」について、共同研究を行ない、これを世に問うた。次に、昭和三十三年度には、「国語教育科学講座」全五巻として、国語教育一般のことを研究し、さらに、昭和三十四年度においては、「文法学習」のことを取り扱った。そういうわけで、今回は、とくに、読解指導を中心に研究を試みることになったのである。

この共同研究は、文学的文章についてであり、この次の年度の昭和36(1961)年度に説明的文章に関する共同研究が行われ、『国語科教育 第九集—学習目標と指導方法Ⅱ—特に説明文の読解指導について—』(全国大学国語教育学会編集/1962.3)としてまとめられている。この動きを見る限り、説明的文章の読解指導は、昭和33年学習指導要領の実施に伴い、本格化したことになる。同書の「はしがき」には、次のように記されている。<sup>17)</sup>

国語科教育を学として発展させるためには、まず現実の事象である国語科教育の事実そのものを明確に把握することが必要である。われわれは、昨年度に引き続き、「学習目標と指導方法との関連」を共通の題目とし、会員の実地授業を中心に、共同研究を進めてきた。その題材としては、昨年度の「物語文の読解指導」をうけて、本年度は「説明文の読解指導」をとりあげた。

ここでは、まず説明文読解指導の具体的なあり方が、小、中、高、それぞれの場合、それぞれの学年段階で示されている。この授業記録によって、説明文の読解指導の系統的なあり方に、ひとつの試案が示されたものと信ずる。

さらに、この授業記録によって・研究協議によって、いっばんに学習の流れはどう展開するか、国語学習指導の型態はいかにあるべきか、などについて、しだいに研究の方向が明らかにされつつあるといえるであろう。

##### (2) 井上敏夫の見解<sup>18)</sup>

(引用者注：「いろいろなおはなし」大橋富貴子授業の研究協議における発言) 井上 説明文の読解指導を学会でとりあげたときに問題になったことは、いま国語科における目標と内容が再び吟味されなければならないような段階にきているのではないかとことでした。特に説明的文章は、子どもにとって必ずしも興味あるものではない。それを生活的な読みで、実際生活の中で読むと同じような気持ちで読ませようとするのには、かなり困難な点があるのではないかと。教科書にとりあげられているような説明的文章の学習指導をする場合に、どのような目標を設定したらよいか。また、それを達成するためにどのような指導方法をとったらよいかということが、説明文の場合に問題になるのではないかと考えてこれを進めていこうとしたわけです。

全国大学国語教育学会の研究紀要『国語科教育』誌において、特集名・論文名に「読解」が出てくるのが、第六集(1959.11)の「中学校編 読解のための文法学習」であり、「読解指導」が現われるのは第九集「―特集―学習目標と指導方法Ⅱ―特に説明文の読解指導について―」(1962.3)である。その前の第八集(1961.3)の特集名は「―特集―学習目標と指導方法Ⅱ―特に小・中・高の読むことの指導において―」である。ただし、論文名には「小学校 読解指導における読書感想文の処理(評価)」もあり、名称の不統一に過渡期的状況が見受けられる。

## 2. 文章ジャンル意識と読解指導―説明的文章指導論始動前の動き―

読解指導論と説明的文章指導論の結びつきを文章のジャンル意識とその指導との関係でとらえる立場もある。

### (1) 渋谷孝の見解<sup>19)</sup>

渋谷孝は、読解指導と文章ジャンル別指導との関係について、次のように述べている。

「昭和22年度(試案)学習指導要領国語科編」および昭和26年度(試案)のそれなどが契機となって、立場はどうあれ、戦後、文章のジャンル意識がひとたびうち出されると、戦前の実状とは対比的に文章の種類を細分化することがさかに行なわれて今日にいたっている。その細分化のあり方は各人各様で、その中には恣意的な、もしくは任意の基準によって成されたとも言えそうな現象を呈している。その上、文章は種類分けして考えた方がよいとなると、こんどは文章の種類が違うのだから、当然指導過程も違うはずだという考え方に発展してきて、ここに文章のジャンル意識が指導過程論に結びついた。飛田多喜雄氏が『国語教育方法論史』(昭和40年、明治図書。第三章「国語学習法」)で触れている「文種に即した読解指導」とか「教材の類型に応じた読解指導」とかは、このような関連の中でうけとめるべきである。

### (2) 渋谷の指摘に該当する飛田多喜雄の記述<sup>20)</sup>

飛田多喜雄の該当の記述は、次の通りである。

(引用者注：「昭和二十六年度を契機とする戦後後期」における指導法の一つとして)教材の類型に即した指導法 この立場は主として読みの学習指導法として唱導された。「文種に即した読解指導」とか「教材の類型に応じた読解指導」として、かなり広く実践界に浸透した。その主張するところは、教材である文章は、その種類や形態によってその発想も様式もちがうから、その表現上の特質をおさえ、それに適した読文行動をさせるのが正しい理解を成り立たせるのに効果的であり能率的であるというのである。<中略>「文種に即して」とか、「類型に応じて」といっても、考え方にはいろいろな相違があった。

この記述からは、昭和26年度以降、すぐに「読解指導」の概念が確立し、広く用いられたように受け取れる。

### (3) 実践現場の使用の事例―飛田の見解との相違―

実際に事例として挙げられているのは、「読解指導」(高崎市立東小学校の研究物1956)及び「文の類型に応じた読ませ方」(千葉県貞元小学校の研究集録1956)であり、少し年代が下がる。同時代のものに次の文献がある。

○『文の類型に応じた読解指導のありかた―その一―』(岩手県盛岡市小学校国語教育研究部1958ガリ版刷)

「昭和三十六年からの指導のあり方をみつめ、市の国語カリキュラムを考えるための一資料ともし、移行期の実践に力を得ようとするための研究の一部である。」(あとがき)とあるように、学習指導要領改定・実施をにらんだ実践研究の記録である。内容は、物語文と意見・記録・広報・通信などの説明文のジャンルに区分される。

○『文の類型にもとづいた読解指導(2) 詩・劇文・日記・説明文・手紙』(岩手大学学芸学部附属盛岡市立仁王小学校1959ガリ版刷)

「まえがき」によると当該校は、1957年6月に『文の類型にしたがった読解指導 その一(物語文の読解指導)』を刊行したとある。本書は、その継続研究をまとめたものである。説明文指導事例が一例掲載されている。

## 3. 1980年代に行われた「読解指導」に関する総括―基点をめぐる総括的な議論―

### (1) 高橋和夫の総括<sup>21)</sup>

基本的に「読解」をめぐる考察となっている。その中に「読解指導」という語が用いられたのは、『実践国語』誌(第158号1953.11)の特集からだ述べ、「それまでは『読解』『読解力』等、今まで見てきた単語だったので、ここに至って、『読解』が『指導事項』となったのである」として、その意義を最大限に称えている。

(2) 小田迪夫の総括<sup>22)</sup>

一九六〇年代以降、説明的文章の読みの指導は、論理的文章の読解力と、その読解による思考力、認識力の形成をめざすようになり、さらに、その説明文の説得的表現性を学ばせることも目論まれている。

## 4. 『読解指導の研究 I 説明文の読解指導』(1957)にみる胚胎期における「読解指導」の基点

## (1) 著作の概要

『説明文の読解指導』(倉沢栄吉・小塚芳夫・佐々木定夫共編1957.4東洋館出版)は、現在確認している中で最も早い説明的文章指導論の著作である。「序にかえて」及び「はしがき」は、研究の体制及び進行方法について述べており、読解グループを編成してその授業記録を研究する共同研究体制をとっている。手順は以下の通り。

- (a) 実践授業
- (b) 実践授業に対する各グループの研究
- (c) 各グループの研究結果の報告および全体の研究討議
- (d) 研究に対する助言・指導(講師)
- (e) 助言をもとにした全体の研究討議

第五章を除き、各章はおおむねこの内容で構成されている。

## (2) 取り上げられている説明的文章指導論の問題点

研究討議において、昭和31(1956)年当時の授業方法や研究課題、問題点、実践研究上の概念の錯綜などが如実に現れている。内容の重視、形式の重視、段落の問題、知識受容の問題、文章構成、読みの意欲喚起、視覚的資料提示の適否、などである。授業記録の検討後で、講師の講話がなされ、その後テーマに即した研究協議がある。書名に「読解指導」の語があるが、その理論は示されておらず、「説明文の読解と段落指導」や「説明文の読解における問題意識法の限界」といった説明的文章読解の諸課題に広く触れようというスタンスである。

## IV. 地方教育史に見る「1960年前後」の説明的文章指導論

読みの指導、読解指導、説明的文章指導論について、「都道府県・政令指定都市単位の比較的規模の大きい取組」と「地方の学校・研究会による研究冊子における取組」に区分してとらえることとする。

## 1. 都道府県・政令指定都市単位の比較的規模の大きい取組

都道府県・政令指定都市では大きな研究会を組織していることが多く、そのいくつかは周年を記念して年史を刊行している。そこに掲載された記録、年表から1960年前後の説明的文章指導論関係の論考名等を拾い上げる。

## (1) 名古屋市『名古屋国語科教育研究の歩み』二村政典・国語教育研究所1988

『名古屋国語科教育研究の歩み』をまとめ、戦前、戦後(1987年まで)を6期に分けて概説している。巻末に年度ごとの全国の状況と研究団体の動向、主要な論文・紀要を掲げている。以下のような特徴が見られる。

- 「読みの指導」昭和29(1954)年
  - ・大竹春義「小学校における国語科読みの指導についての研究」(『研究要録』名古屋市教委)
- 「読解指導」昭和32(1957)年
  - ・岩本高治「入門期の読解指導法五か条」(『国語人4号』国語人の会)
- 「科学的文章」「説明文」昭和34(1959)年
  - ・小林惣司「科学的文章の読解指導法について」(『研究要録』名古屋市教委)／後藤正子「文意把握の指導—論文調説明文」(『年報1号』名古屋市国語研究会)
- 「思考力」昭和35(1960)年
  - ・二村政典「思考力・認識力をどのようにして伸ばすか—説明的な文章を中心にして」(『愛知の教育10次』愛教組)

## (2) 徳島県『徳島県小学校国語教育五十年史』徳島県小学校教育研究会国語部会・教育出版センター1986

「第二章 研究実践のあしあと」が(年表編)まとめられている。そこには、以下のような特徴が見られる。

- 「読解指導」昭和28(1953)年
  - ・三木就「文種に応じた読解指導」(第四回小学校教育研究会教科講演・徳島大学学芸学部附属小学校)
- 「説明解説文」昭和31(1956)年
  - ・山元安吉 宮内小「説明解説文のとりあつかい方」(第一回徳島県国語教育研究会発表)
- 「説明文」昭和32(1957)年
  - ・遠藤忠夫 長尾小「中学年 説明文」(第五回美馬郡国語教育研究集会実践発表) / 住友 武明 脇町小「中学年 説明文」(第五回美馬郡国語教育研究集会実践発表)
- 研究主題としての「説明文の読解」昭和33(1958)年
  - ・主題「説明文の読解と作文教育」(第五回美馬郡国語教育研究集会)
  - (3) 香川県『45年史』香川県国語教育研究会 1989(印刷青葉教育社)
- 「説明文」昭和28(1953)年
  - ・池田義典 実践授業「第5学年説明文 段落のつかみ方」(第4回西日本国語教育研究会)
- 「読みの意識」「読みの問題意識」昭和30(1955)年
  - ・平井昌夫 部会討議「説明文解説文の読みの意識」(第6回西日本国語教育研究会) / 倉澤栄吉 部会討議「読みの問題意識」(第6回西日本国語教育研究会)
- 「説明的文章の読解指導」昭和35(1960)年
  - ・井上郁夫 志度中、岩井進 満濃中、葛西知一 桜町中研究授業「説明的文章の読解指導」(第11回西日本国語教育研究会・第12回全国大学国語教育学会・第10回全国国語教育研究協議会)
  - (4) 愛媛県『国語教室の伝統と創造』愛媛国語教育研究会・1976 明治図書  
愛媛国語教育研究会が年3回刊行してきた「国語研究」(昭和24(1949)年創刊)掲載の「論考等三五〇余編の中から」「代表的な論考・講演記録を選び出して」たものであり、巻末に「国語研究」誌の目次が付されている。
- 「説明文の読解指導」昭和35(1960)年
  - ・楠橋猪之助「説明文読解指導についてのあれこれ」(「国語研究第34号」)
  - (5) 千葉県『国語教育四十年の歩み』千葉県教育研究会国語科教育部会 1986
- 「文章の類型」昭和28(1953)～30(1955)年
  - ・我孫子市立我孫子第一小学校研究主題「文章の類型に即した指導のあり方」
- 「読解指導」昭和32(1957)年
  - ・大林幸雄 八幡小「読解指導上の発問と板書について」(「ちば・こくご第2号」)
- 「説明的文章の読解指導」昭和35(1960)年～46(1971)年
  - ・香取郡山田町立八都小学校研究主題「説明的文章の読解指導法の改善」  
⇒『調査反応による説明文の読解指導』荒井栄指導・千葉県八都小学校著 1965 穂波出版
- 「説明的文章における思考力」昭和39(1964)年
  - ・香取彦夫 八都小「説明的文章における思考力の形成とその指導に関する実証的研究—小学生—」(「ちば・こくご第5号」)
  - (6) 岩手県『知言 県国研三十年の歩み』岩手県国語教育研究会連合会 1989
- 「読解指導」昭和33(1958)年 ※同書の記録は昭和33年から
  - ・及川栄雄 研究授業「小学校における読解指導」(岩手県国語教育研究会第一回大会) / 野中一彌 研究授業「中学校における読解指導」(同上) / 鎗田基和 研究授業「高等学校における読解指導」(同上)
- 「実用的文章・科学的文章」「論説的な文章」昭和34(1959)年
  - ・中村義一 研究授業「論説的文章の指導」(岩手県国語教育研究会第二回大会)

## 2. 地方の学校・研究会による研究冊子における取組

- (1) 「文の類型に応じた読解指導のありかた—その一—」岩手県盛岡市小学校国語教育研究部 1958
- (2) 「文の類型にもとづいた読解指導(2)詩・劇文・日記・説明文・手紙」岩手大学附属盛岡市立仁王小学校 1959  
「話すこと書くこと」という説明的文章教材(学図5上)の指導計画を提示している。

- (3) 「新編新しい国語 説明的な文章の研究—効果的な読解指導のために—」 仙台国語の会 1959  
東京書籍準拠、原論、各学年説明的文章教材の文法的教材研究例を提示する。
- (4) 「説明的文章の問題—徳島県児童生徒の読解力の現状を診断する—」 徳島県立教育研究所 1962. 3  
文法的理解、要点、段落、要約、「題目づけ」、速読み能力と一般読解能力などの調査項目がある。
- (5) 「昭和 37 年度研究集録」 新宿区教育研究会国語研究部 1963  
同誌中に新井哲雄 新宿区立津久戸小「読解力を高める系統的指導法について」段落指導の系統表が示されている。「思考の一貫性を重視」とあり、内容的に説明的文章教材用と見受けられる。
- (6) 「昭和 37 年度 中学校国語科学習指導法の調査研究—説明文の読解力を高める指導を中心にして—」 東京都立教育研究所 1963. 2  
読解力調査（教材文）、授業の事例研究、事後調査（情意面、難解箇所、理解成立箇所）が内容となっている。
- (7) 「研究紀要 主体的に説明文を読みとる力をどのようにしてつけるか」 揖斐郡大野町立西小学校 1963. 1. 30  
「物の名まえ」「まりも」「野生のさる」の授業例。社会科・理科に資する説明的文章読解を目的とする。
- (8) 「目的に応ずる読解指導の研究 読解の基本的学習構造 研究報告第二集」 東京都文京区立金富小学校 1963. 12. 6  
説明的文章教材として、「(1)指示・情報を得て生活に適応するための教材 (2)知識を得て教養を高めるための教材 (3)経験を深め、思想を豊かにするための教材」を挙げている。文種例として(1)「指示・掲示、報告・報道」、(2)「指示・説明・記録・報告・解説」、(3)「論説・思索」がある。
- (9) 「昭和 39 年 2 月 25 日(火) 文章の読解指導 公開授業指導案」 東京都中野区立中野神明小学校  
5 年の「通信について」(2 時間分)の説明文の事例がある。2 時間とも要点把握が授業目標である。

### 3. 地方教育史に見られる「1960 年前後」の説明的文章指導論の基点に関する総括

1955 年頃から地方における実践的研究が盛んになっていく様相が見て取れる。おおむね、最初は、文種別、文の類型別指導が中心だったが、次第に説明的文章指導に統合され、それに「思考力」育成が加味されていくという経過として捉えられる。その時期は、ほぼ中央ないし戦前からの研究機関（国立大学附属校等）における出発物で扱われていく研究課題と機を一にしている。別の視点から見ると、出発物を地方が積極的に取り入れるとともに、さまざまな学校・研究会単位で独自の取組を展開していったということもできよう。

## V. 総括及び今後の課題

### 1. 総括—基点の形成とそこからの新たな起動—

1961 年学習指導要領実施をめぐる諸方面の動向の探究から戦後説明的文章指導論の基点のいくつかを探ることにはできた。その結果、次の点が明らかになった。

まず、昭和 33 年告示学習指導要領実施に向けての中央、地方の動向に一定の盛り上がりの機運と問題状況の整理が行われていることである。特に「読解指導」という用語の新しさとその定着、駆使の過程が説明的文章指導論の充実、発展との関連は、予想を上回る一致度であり、大きな基点として定位することができる。

ついで、「読むこと」から「読解」への変更・変容、また「読解力」という学力観の明確化、「読むことの指導」から「読解指導」への変更・変容、そして読解指導過程としての定式化という展開に、説明的文章指導論の確立、整備の展開も合致させてとらえることができたことも挙げられる。変革期には重複も見られるが、おおむね用語や概念、指導方法の変更・変容に従って、段階の進行があることが見て取れる。基点という視点から見ても理論研究側、実践研究側のいずれも新しい理念、方法論の提唱を基点としてとらえていたことが分かる。

さらに、昭和 33 年告示学習指導要領実施以降の取組においては、授業研究を中心に実験的に取り組まれてきたことが見受けられる。これは芦田恵之助に代表される授業記録の重視とその活用という遺産が最大限に生かされた結果とみることができる。実践研究の方法としての一基点を示すものと見ることができる。

## 2. 今後の課題

今後、1961年後の指導過程の定式化に対して、この時期の基点形成がどのように作用していったかを追究していくことが求められる。またこれらの基点のとらえ方がその後の官民ともに研究団体の研究内容、実践方法の提起に大きく影響したことを明らかにすることが必要である。ついで文献や地方教育史における研究冊子についての把握が網羅的であり、分析的に掘り下げられなかったことが大きな憾みとして残った。さらに本稿では、「思考力」、「思考力育成」について十分に検討することができなかった。以上のことを今後の課題としたい。

### <引用文献・参考文献>

- 1) 植山俊宏 (1997) 「戦後説明的文章指導論の展開(1)-「意味理解」規定とその変容-」『教育学研究紀要』第42号第二部/中国四国教育学会編/pp. 1-16
- 2) 植山俊宏 (1999) 「戦後説明的文章指導論の展開(2)-指導過程整備の動向-」『教育学研究紀要』第44号第二部/中国四国教育学会編/pp. 1-6
- 3) 植山俊宏 (2000) 「戦後説明的文章指導論の展開(3)-小松善之助著『説明文読解指導の構想』を中心に-」『教育学研究紀要』第45号第二部/中国四国教育学会編/pp. 31-36
- 4) 植山俊宏 (2000) 「戦後説明的文章指導論の生成-読総合法提唱段階における説明的文章指導論の取り組み-」野地潤家先生傘寿記念論集/pp. 149-161
- 5) 植山俊宏 (2001) 「戦後説明的文章指導論の展開(4)-学力観の変容を中心に-」『教育学研究紀要』第46号第二部/中国四国教育学会編/pp. 73-78
- 6) 植山俊宏 (2003) 「戦後説明的文章指導論の展開(5)-小学校教材「鳥取砂丘」を中心に-」『教育学研究紀要』第48号第二部/中国四国教育学会編/pp. 72-77
- 7) 植山俊宏 (2004) 「戦後説明的文章指導論の展開-小学校教材「動物のへんそう」を中心に-」『中西一弘先生古希記念論文集』/pp. 243-255
- 8) 植山俊宏 (2004) 「戦後説明的文章指導論の展開(6)-説明的表現への重点化を中心に-」『教育学研究紀要』第49号第二部. 中国四国教育学会編/pp. 507-512
- 9) 植山俊宏 (2006) 「戦後説明的文章指導論の展開(7)-萌芽期における興水実-」『教育学研究紀要』第51号第二部. 中国四国教育学会編/pp. 404-409
- 10) 植山俊宏 (2006) 「戦後の教育論争に見る問題点」『教育科学・国語教育』/No.668/pp. 20-23
- 11) 井上敏夫 (1981) 「読解指導の問題点、その推移」『国語科教育研究：7 特集＝読解指導の再検討』井上敏夫・野地潤家編/明治図書/p7
- 12) 「国語教育主要文献目録」(1988)『国語教育研究大辞典』国語教育研究所編/明治図書/pp. 917-938
- 13) 常木正則 (2001) 「読解指導」『国語教育辞典』日本国語教育学会編/p287
- 14) 市毛勝雄 (1981) <sup>11)</sup> pp. 59-60
- 15) 井上敏夫 (1981) <sup>11)</sup> p30
- 16) 石井庄司 (1961) 「国語科教育の目標とその方法」『国語科教育 第八集-特集-学習目標と指導方法-特に小・中・高の読むことの指導において-』全国大学国語教育学会編集/pp. 86-87
- 17) 執筆者不明 (1962) 「はしがき」『国語科教育●第九集●-特集-学習目標と指導方法Ⅱ-特に説明文の読解指導について-』全国大学国語教育学会編
- 18) 井上敏夫 (1962) 「小学校低学年 研究協議」『国語科教育●第九集●-特集-学習目標と指導方法Ⅱ-特に説明文の読解指導について-』全国大学国語教育学会編/p20
- 19) 渋谷孝 (1978) 『説明的文章の指導過程論』明治図書/p37
- 20) 飛田多喜雄 (1965) 『国語教育方法論史』明治図書/pp. 318-319
- 21) 高橋和夫 (1981) 「読解力観の推移と展望」『講座国語科教育の探究③理解指導の整理と展望』全国大学国語教育学会/pp. 144-165
- 22) 小田迪夫 (1988) 「説明文教材化の歴史」『国語教育研究大辞典』明治図書/p556